東京白楊だより

第26号
平成15.9.1
（2003年）

白楊ヶ丘同窓会東京支部
旧制函館中学校
函館中部高等学校
ホームページアドレス　http：//www.hotweb.or.jp/hakuyou/

写真提供　67期・吉岡直道氏（函館在住・吉岡写真館）

友情

白楊ヶ丘同窓会東京支部長
杉田　博子
54期（昭和27年卒）

友達とは何でしょう。庁立高女へ入った時の音楽の先生は普段はとてもやさしくて、市電を降りて学校までの坂道を、誰とでも手をつないで登校する先生であったが、音楽の時間になると、とてもきびしくて誰かの音程が間違っていれば全員が叱られた。音楽の授業の前の休み時間は誰かが弾くピアノに合わせて、手が痛くなる程拍子をとり、コールユーブンゲンを練習したのを想い出す。苦手な人を皆で支えて歌えるようにした団結力が、今もなお友情として続いている。

青春時代に培われた友情は歳を重ねる程に、強く結ばれるような気がする。「友情は楽しさを倍にして悲しさを半減させる」といわれる。逆境の時こそ支えてあげられる友達でありたい。

私事ですが三種類のおけいこごとを三十年続けている。それもそこへ行けば良い友達が居て楽しいから続けられた。だからまわりの人達に感謝している。ひとりでも多く友達でいたい。ちなみに先日の合唱祭の曲の一節。「たとえば君が傷ついて、くじけそうになった時は、必ず僕がそばに居て支えてあげるよ、その肩を」。かくありたいと胸が熱くなる。

「函館の未来を」

函館中部高等学校校長　宮下　勤

函館の町が少し変わり始めたように思います。ここ数年前から、公立はこだて未来大学の学生や若い人が中心になって、大門広小路で「大門祭」を催すなど、駅前にも、少し明るさが感じられるようになりました。光をテーマに設計された函館駅も、「ピアポ」と命名され、函館の新しいシンボルとなりそうです。また、函館公園にあった市立図書館に代わって、五稜郭公園そばに「中央図書館」が新築されますし、今年は、函館の歴史を再現した五稜郭公園での「野外劇」も、内容を一新しました。このような話題に、多くの市民が、函館再生の期待を寄せているように感じます。

しかし、ここ函館も少子化による影響が顕著になってきました。函館市内には、市立高校が二校、道立高校が五校、私立高校が八校ありますが、これまで、公立高校と私立高校との共存を大きな柱に、それぞれが、学級減や募集定員の削減という形で生徒減に対応してきました。それも、中学校卒業生が大幅に減少する平成十七年度に限界に達することがわかっております。釧路市や旭川市では、すでに高校の再編計画が提案され、全道的にも大きな話題になっておりますが、いよいよ、函館でも高校の統廃合が現実的な問題となります。函館市でも、今年中には懇話会を立ち上げ、高校の再編計画についての検討に入るようです。学校の存続は、その地域や同窓生にとっては大きな問題ですが、函館市の将来にかかわる問題だけに、各学校が、自校だけはという観点でこの問題の解決を図ろうとするのではなく、道南の未来も踏まえた総合的な視点で検討することが大切であると考えています。

教育改革や学力向上対策が大きな話題となっておりますが、今年度より、北海道教育委員会では、文部科学省の「スーパー・ハイスクール」と同様の新規事業として、エコーハイスクールプロジェクト（夢と活力あふれる高校づくり事業）を実施します。道内五十三校が北海道独自のテーマで研究指定を受ける予定ですが、本校はこれに先駆け、今年度より三年間、文部科学省の「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」の研究指定校となりました。この指定校の趣旨は、これからの国際化時代に対応した「英語によるコミュニケーション能力の育成」をねらいとしています。本校では、三年間で、すべての生徒が日常会話ができる程度の実践的なコミュニケーション能力を育成することが目標です。

函館は、これまで国際都市として発展を遂げたこともあり、英語教育を重視してきた歴史があります。本校のこの取り組みは、道南の高校教育の活性化、さらには、函館の活性化の原動力になればという大きな夢への挑戦でもあります。この指定校を契機に、文武両道の校風をさらに大切にしながら、教育活動の一層の充実を図り、新しい中部高校の創造をめざしたいと考えております。

さて、函館は北海道の高校の中でも、歴史的に古い高校が多いだけに、ここ数年、多くの高校で、周年行事や校舎の改築が行われております。本校の創立一一〇周年記念は、平成十七年度に予定されておりますが、いよいよ、あと二年となりました。多くの方から問い合わせが寄せられておりますが、今年中には、協賛会を立ち上げる予定となっております。

最後になりましたが、同窓生の皆様には、日頃から本校の教育活動に、ご理解をいただきまして、誠にありがとうございます。本校が、さらに大きく羽ばたくためにも、どうか、同窓生としての広い視点で、ご支援、ご協力をお願いしたいと存じます。

皆さんのますますのご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げます。

ポプラの下に集いし我ら

道内公立高校の中で最も古い伝統を誇る函館中部高校は108年を迎え『文武両道・質実剛健』の校風は滔々と受け継がれ自主・自由とともに妥協を許さぬあくなき向上への気風は「白楊魂」と謳われ、風雪に耐え天空高く真直ぐに伸び行くポプラの逞しさに象徴され、一世紀を越えた現在も本校教育の理想として貫かれている。明治39年新校舎完成後間もなくポプラの植え込みが行われ、大正末期には若木は美しい並木となり、いつしか「ポプラが丘」と呼ばれるようになった。

『母校をとりまく風景は日本でも実にめぐまれた美しい風景だったことに気付くのである。牧場と緑と、海峡の紺碧の波と、砂山に寂しい色と・・・。日曜日にはトラピスト女子修道院の前の野原によく出かけた。春の若草の頃その鈴蘭畑の中に仰向けに寝そべって、ひばりのさえずりを聞くのが何よりのたのしみだった。』と26期生の亀井勝一郎は述懐している。

砂山に向けて広がるキビ畑も時任牧場の牛の姿も、今や遠きいにしえの思い出にすぎないが、ポプラに託された函中生の気概はいつまでも失いたくないものである。

白楊ヶ丘同窓会東京支部
第26回親睦大会

来賓の方々

第26回親睦大会は、平成14年10月18日（金）午後6時45分から、東京都港区の青山ダイヤモンドホールで開催された。当日は、約220名の出席を見たが、200名を超えるのは近年にないことであり、盛大な大会となった。
本大会は、恒例となっている同窓生による講演に替えて、「呼び戻そう、青春の熱気！白楊祭の感激をもう一度！」をメインテーマに、会場入り口周辺に各年代の卒業アルバムから採った白楊祭の写真のコピーを展示、会場では、ジャズバンドがスタンダードナンバーを演奏して雰囲気を盛り上げた。これらは、71期生が中心となって企画、推進した。

理事 加納　元雄
71期（昭和44年卒）

盛会だった第26回親睦大会

卒業アルバムの展示は、古くは昭和7年から最近では2000年のものまで70年におよび、また、函中70周年記念誌から採った記事や写真も加えて、多彩を極めた。スペースや準備時間の都合で人目を惹くものとはならなかったが、学生の表情・服装・周囲の景色は、当時の世相や学生たちの熱気を感じさせるのに十分であり、出席者は、開場前や会場を抜け出したひと時に、これらに見入っていた。

親睦大会は、69期吉田雄治さんが司会、同じ69期の米木かをりさんのピアノ伴奏で同窓会歌である旧制中学校校歌「玄冥の北の一道……」を合唱することから始まった。最初に、54期杉田博子支部長が主催者を代表して開会挨拶を行った。引き続き当日出席された来賓を紹介し、代表して山内同窓会会長の来賓挨拶があった。

校歌合唱

続いて、前東京支部長の52期二上達也日本将棋連盟会長の発声で乾杯を行い、歓談に入った。今回も卒業年代別にテーブルを分けたが、同期生同士で旧交を温め合う人、テーブルを離れて世代を超えた交流を図る人と、何時もながらに談笑の輪が広がって行った。

今回は、アトラクションとして「ゴールドウィングス・ジャズオーケストラ」という、浦安市、市川市在住のアマチュアを中心とした総勢十六人のビッグバンドを招いた。地域在住の71期生がたまたま聴いてファンになり、今回の出演となったものである。

ゴールドウィングス・ジャズオーケストラ

演奏は、71期生で元ブラスバンド部員の佐藤元嗣さんの司会により行われた。一部・二部に分かれて、全部で19曲のジャズスタンダードナンバーが演奏された。

何れもポピュラーな曲ばかりで「音楽を聴くと心が浮き立つね。」「ここ数年来なかったのだが、今回はジャズ演奏があると言うので来てみた。わざわざ出てきた甲斐があった。」「この曲は、私の青春時代に流行した曲だ。本当に懐かしい。」等と、好評であった。

最後には、ステージ前でダンスを踊り出す会員も出て、会場は大いに盛り上がった。

また、一部と二部との間で、今年も98期の「う～み」（本名＝山形夕佳さん）が自作の歌を歌った。う～みが親睦大会で歌うのはこれで3年目になるが、年々着実にレ

踊る同窓生たち

【第一部】
素顔のままで/夜のストレンジャー/I'll Never Smile Again/I Wish You Love/ALFIE/いそしぎ/Too Little Time/素晴らしき世界/シバの女王/星に願いを
【第二部】
二人でお茶を/ベサメ・ムーチョ/キエン・セラ/一晩中踊り明かそう/Orange Colored Sky/It Don't Mean A Thing/A列車で行こう/ブラジル/聖者が街にやって来る

ベルアップしている。関西や、更には四国に拠点を置いて音楽活動を続けているとのことで、東京支部の会員が接する機会は少ないが、才能にますます磨きをかけて、活動領域を広げて欲しいものである。

98期う～み

このようなアトラクションにより、会場の熱気は高まる一方で、アンコールも相次いだ。

最後に、米木さんの伴奏で、函館中部高校校歌を合唱したが、一番から四番まで通して歌ったのは、米木さんの記憶では初めてだそうである。

散会したのは、定刻をオーバーして午後9時過ぎとなった。

企画・準備に参加する意義

ここで、親睦大会本番に至る準備作業を振り返ってみたい。

第26回親睦大会の企画を71期生が担当することに決まったのは、4月の評議員会で、同期の島田夕起子さんが親睦大会の活性化を求める発言をし、それなら言い出した71期でやってはどうか、となったものである。

その後、同期生の有志が集まって企画を練り、「白楊祭」のコンセプトを決めた。

8月には何人かが函中に飛んで、保存してある卒業アルバムを借りて写真をコピーした。母校に保存されているアルバムは意外に少なく、その後同窓会役員のお力も借りて不足分を補ったが、それでも、すべての年度をカバーし切れなかった。函中の歴史を雄弁に語る卒業アルバムが散逸していることは、誠に残念である。

また、「Gold Wings」との出演交渉、曲目等の打合せも並行して行った。このバンドはアマチュアなので、渉外担当者との勤務時間後の打ち合わせとなり、当初はバンド内での意思疎通がきちんと取られているのか心配させられることもあった。それでも司会者の佐藤さんが根気強く交渉し、本番数日前には曲目、出演者が確定した。

当日は、71期有志11人が午後3時半に会場に集合、アルバム写真パネルの作成と展示から作業にかかった。恒例となっている函館観光ポスターの展示、ステージ、テーブル等の会場設営も順調に進み、午後5時過ぎには開宴の準備が整った。

バンドは予定通り6時に入り、セッティング、リハーサルを始めたが、この時点から終了後の片付まで、控え室での接待、会場誘導等のため三人の71期生がフルアテンドした。

これらの準備を買って出たメンバーは、当然仕事や家事を抱えており、その合間を縫っての作業となった。しかし、白楊祭の時期には勉強やクラブ活動をしながら準備したのを思い出し、当時の乗りそのままで臨んだ結果、大きな失敗もなく、そして何よりも、準備に携わった者が誰よりも親睦大会を楽しむことが出来た。

この辺りが、高校時代の「白楊祭」を最も忠実に再現していたところかもしれない。当時も、他のことに忙しくて準備にかかわれなかった生徒や、ましてや当日覗きに来るだけの外来者よりも、それまで白楊祭に深くかかわり飛び回っていた生徒の方が、本番でも活き活きと、誰よりも祭りを楽しんでいたものであった。

今後の親睦大会、そして同窓会のあり方は

後日、親睦大会に係わった関係者により反省会が行われた。今回の企画については、様々な意見、感想が出されている。

「会員たちの演奏ならなお良かった」

「講演がなかったのは寂しかった」

「例年に比べ内容が大きく変化したが、これで良かったのか」

「次回以降は今年以上に娯楽性の強い内容にするべき」

「時には公演、時には講演、説法など、今魅力を感じる内容であれば良いと思う」

皆、それぞれに思いが違うようである。

娯楽性を追及すれば、他の多くの娯楽と競合し、それ等に勝てる内容を提供し続けられるのか、という問題に行き着く。会員が自ら行う企画にこだわれば、出席者の興味を引き、新鮮さを保ち続けられるのかが、問われる。

大会の企画は、今後もその間を行きつ戻りつすることになるのであろう。そこには、同窓会にとって避けることが出来ない問題を含んでいる。まず、年齢が三世代に渡るので、共通する興味を特定するのは至難である。

また、会員の唯一の共通点は、言うまでもなく「函中」を卒業したということだが、その学校の内実は時代によって著しく異なっている。「白楊魂」という言葉は現在も生きているようだが、時代・世代を超えて共通する精神を共有できているのかとなると、甚だ心もとない。

また、同窓会に集う人たちの思いもさまざまである。ある人には自らのアイデンティティを確認する場であったり、青春を懐かしむ場であったりする。或いは社会に開かれた窓の一つであったり、更には娯楽の場、もしかするとビジネスの場であるのかもしれない。

従って同窓会のシンボルである親睦大会も、一律にあるべき姿を規定することはできない。そのような種の「危うさ」を内在した同窓会は、それが生きる上で必須のものではなく、且つボランティアによって成り立っているだけに、そこに何らかの価値を見出す人たちの、「手と足」と「汗」によって、そのあり方が決まる。「口」や「頭」は二の次である。

私たち71期生は、「私たちにとって『楽しめる』親睦大会とは何か」をテーマに、限られた時間とパワーの中で、ひたすら「楽しむこと」を追求した。

しかし、それが同窓会のあり方のすべてではあるまい。「手と足」を動かし「汗」をかける人が、その時々の自分達の思いで作り上げて行く、そこに「函中同窓会」の本質があるように思う。その結果、同窓会のありようは揺れ動くであろう。その揺れを体感しながら、人との交わりを広げて行くのも、同窓会に参加する楽しみの一つであろう。少なくとも、同窓会の場で何かをしようとする意欲を受け容れ、それによって常に変容して行く会であって欲しいと思う。

そして、まさに今回の大会がその実例であり、それを許容して下さったすべての会員の方々に、71期生の一人として心から感謝を申し上げたい。

改めて、好い学校を卒業した幸せを、噛み締めているところである。

100・101期生たち

第26回・東京支部親睦大会出席者一覧　（平成14年10月18日・青山ダイヤモンドホール）

昭和13年卒（第40期）相馬泰二
昭和16年卒（第41期）家坂孝男・井筒吉彦・梅崎総一
昭和18年卒（第45期）神山茂郎
池上謹之助・小笠原敏雄
田沼修二
昭和20年卒（第48期）渡辺丞二
昭和21・22年卒（第49・50期）伊東克朗・佐々木信博
田中昭吾・西郡敏夫
橋本昌璋・山口快象・山田　茂
昭和23・24年卒（第51期）今井辰一郎・岩元照男
小野寺吉彦・近藤充夫
三浦庸夫・三國比左男
昭和25年卒（第52期）石田　端・小泉龍彦
瀬田松吉昭・長島　康
福津達男・二上達也
昭和26年卒（第53期）佐々木順一
昭和27年卒（第54期）遠藤　宏・小宮山恵三郎
高橋邦年・松岡康宏
杉田博子・保田恵美子
昭和28年卒（第55期）納代鉄也
赤澤　高・阿部　健・加藤富蔵
北原　徹・栗崎健一・香西　慧
鍋谷七郎・河村和子・横井静子
昭和29年卒（第56期）浅岡　勤・高橋正美・藤本一郎
昭和30年卒（第57期）桜庭　晃・椎名三五・吉田精吾
小竹嘉子・松川澄子
昭和31年卒（第58期）小川英夫・奥石熙一・坪田憲俊
永野　巌・広田洋吉・藤原正樹
唐沢フミ子・早川光江
宮川美智子
昭和32年卒（第59期）笠原静雄・真船　昭
昭和33年卒（第60期）北原耕太郎・紅谷弘一
水江彰一・高橋留美子
昭和34年卒（第61期）相澤貞俊・岡本　興・金子公彦
菊池紀邦・佐々木住明
手代木皖司・橋本正夫
畑中万弘・福島住孝・松本　充
利光美子・藤田美穂子
堀内恵子・三上和子・水島晴江
昭和35年卒（第62期）荒井　浩・石原雄一郎
小松康宏・佐近　勇・志野幸男
須藤紘一・玉川　修・石田公子
昭和36年卒（第63期）小熊勝夫・小林嘉則
土橋道子・福本元子
昭和37年卒（第64期）大原淳一・鈴木三則・徳田定勝
杉浦左知
昭和38年卒（第65期）阿部健司・菅原大作・谷口　勝
昭和41年卒（第68期）越中谷庸三・木戸正文
及能誠一・相馬　亮
大河原綾子・児玉久美子

昭和42年卒（第69期）梅田五郎・笹　光政・高木　隆
吉田雄治
梅田やよい・大久保節子
斎藤裕子・松坂きみえ
米木かをり
石黒秀喜・佐藤勝義・高橋裕司
南　隆義
斎藤七穂・斎藤真理子
石橋秀樹・井上和博・小倉清春
加納元雄・川村哲雄・佐藤元嗣
相馬　篤・高田幸樹・高橋　信
千葉喜政・中泉光一・中村興治
成田秀信・宮林正博・吉田元久
市澤仁美・男谷洋子・古賀純子
座間美知子・島田夕起子
善　順子・牧野京子
柳田美知子
昭和43年卒（第70期）池田英一・梶原保男・神垣善一
加藤哲夫・菊池佳裕・小林繁治
笹川浩史・谷口雅典・長原　博
昭和44年卒（第71期）丹羽　修・村上誠一・渡部敏雄
内田康子・笹川光代・佐野香苗
八木匡子
昭和45年卒（第72期）山田　朗
河村浩介・近藤　薫
高橋日出樹・吉川忠幸
桑原洋子
昭和46年卒（第73期）白川正広・町原秀臣
昭和48年卒（第75期）大鹿栄樹
昭和49年卒（第76期）垣坂　清・関口勝也・高橋邦明
昭和50年卒（第77期）長澤一徳・成田吉道・福本泰久
昭和51年卒（第78期）岡部あさ子・富山香里
瓜谷暢樹・片瀬裕巳・高田博臣
西谷尚久・山本直樹
昭和53年卒（第80期）小林八千代
昭和54年卒（第81期）松永　久
昭和56年卒（第83期）松山哲人
昭和58年卒（第85期）加戸茂樹
昭和61年卒（第88期）酒井道彦
昭和63年卒（第90期）石井清香
平成8年卒（第98期）山形夕佳
平成10年卒（第100期）五十嵐淳・後藤佑輔
伊勢屋年宏
石田雄一・大良信哉・小松祐樹
佐々木宏樹・杉崎恵一
中浜大輔・早川直基・保立恵太
山本卓也・山本　司
大江絵美・佐賀井奈美
相馬絵里・相馬麻由子
高橋令恵・三ツ石泰子
平成11年卒（第101期）

参加者総数　228人

特集

青函連絡船・洞爺丸

青函航路の誕生

鉄道国有化　明治41年

青函連絡船は国鉄が開設した航路の第一号である。明治時代、東北本線の前身である日本鉄道によって計画され、一九〇六年（明治三九）に二隻の汽船がイギリスに発注された。

しかし、この年は歴史に残る鉄道国有化の年であった。日本鉄道は十一月に政府に買収され、一九〇八年国鉄初の直営航路として青函航路が開業した。日本初のタービン機関船として発注ずみの二隻がそのまま就航し、比羅夫丸と田村丸で各船一日一往復、それまでの6時間航行を4時間という早さに短縮した。

青函連絡船は年々需要が増し、それとともに運航便数も増加していった。貨物輸送量の増大に応じて貨物専用船も就航した。

比羅夫丸

貨物運送の始まり

列車と船の乗換は、旅客の場合は列車同士の乗換と同じであり、ただ歩くだけですむ。ところが貨物の場合、当初は貨車から船へ、船から貨車へと二回の積卸しが必要であった。大正時代中ごろまでの鉄道連絡船は、全国のどこの航路でもこの過程をへて貨物輸送を行っていたのである。

貨物の輸送需要が伸びてくるとこのような手間のかかる方法は嫌われるようになった、そして、数年にわたる研究・試用ののち、一九一九年（大正八）、当時の関門航路で貨車航送が開始された。青函航路への導入は一九二五年（大正十四）で、本州と北海道の貨車の連結方式や、大型船の就航など、さまざまな改善をほぼ同じ時期に推し進めた。

大平洋戦争の痛手

大平洋戦争の末期の一九四五年、青函航路はアメリカ海軍による大空襲に見舞われた。七月から八月にかけ、当時の客載貨物車渡船四隻全部と貨車航送船六隻が沈没、これより前に二隻を事故で失っていて、青函航路は全滅した。

戦後は、商船の復興の手始めに鉄道連絡航路が位置づけられたおかげで、青函航路の復興は比較的早かった。相次ぐ新造船の就航で一九四八年（昭二三）には一四隻の連絡船がそろい、同航路史上、最大の輸送力を確保するにいたった。

明治41年に完成した函館・青函連絡桟橋

北海道・函館に青函連絡桟橋が設置されたのは明治41年のことだ。それを記念して、函館駅を挟んで、列車と船が待機している写真絵葉書が作られた。だが、この写真、よく見ると不可思議なのだ。天気は上々というのに、背景に見えるはずの函館山が影も形もないからである。

当時、函館山には要塞司令部が置かれていたため、撮影禁止だった。一般の人々のハイキングも、砲台のある頂上に立ち入ることも禁じられていた。風景写真の中に函館山を撮ってしまった場合は、必ず山は消すよう申し渡されていたのである。

青函連絡船の開通により、北海道内の農産物や乳製品が大量に本州へ運ばれていくようになった。また、その頃、函館は遠洋漁業の港町として栄え、昭和9年の函館大火が起こるまで道内一の人口を誇っていた。同20年の函館空襲で青函連絡桟橋は壊滅したが、貨物船による輸送で切り抜けた。なんといっても、青函連絡船の悲劇は同29年9月の死者不明者1155人を出した洞爺丸事故だ。

洞爺丸事故

青函・宇高連絡船は戦後日本の復興輸送に大きく貢献した。青函航路では、国鉄技術の粋を集めた洞爺丸型四隻が主力として活躍するようになった。

ところが、一九五四年（昭二九）九月二六日、津軽海峡を襲った台風一五号のため、第四便の洞爺丸が函館を出港後に沈没、一、一五五人が死亡する大惨事となった。翌一九五五年には宇高連絡船が霧のために貨車渡船と衝突・沈没（一六八人死亡）し、連絡船の安全対策が見直された。

最後の新造船

洞爺丸事故後、台風の被災船の代替用に客貨あわせて三隻が造られた。さらに一九六四年から六七年にかけては過去最大級の船がつぎつぎに新造され、青函航路の輸送能力は格段にアップした。昭和三〇年～四〇年代は高度成長経済やレジャーブームの時代で大いにぎわった。

一九七〇年の半ばごろから、青函連絡船は凋落の一途をたどった。船のせいではなく、鉄道そのものの衰退のためである。東京～北海道間の移動は、旅客は航空機、貨物はトラックが主流となり、鉄道の一環としての航路が衰退するのは自然の流れだった。

一九八八年（昭和六三年）三月十三日夕刻、最後の連絡船が函館、青森出港、八〇年の青函連絡船の歴史を閉じる。なお同日朝、青函トンネルの営業運転開始。

青函連絡船・洞爺丸

入港する御招船・洞爺丸

青函連絡船・洞爺丸は、一九四七年（昭和二十二年）十一月二一日に青森函館間航路に就航した。戦争によって壊滅状態となった青函連絡船増強計画の一環として建造されたものであり、当時最新鋭の船舶（客貨船）だった。

三八〇〇トン四本煙突、長さ（垂線間）一一三、二m、積載車両軌条二条、旅客定員約一一三〇名。一九五〇年（昭和二五年）十月十八日には、日本で初のレーダーを装備して運用開始している。

洞爺丸は、一九五四年（昭和二九年）八月七日には、天皇皇后両陛下の御召船の役目を果たしている（北海道国体臨席のため）。青森発十四時〇〇分、洞爺丸の前後左右には「おじか」「あつみ」など六隻の巡視船が並走、海峡中央では防衛庁自衛艦隊二四隻による登舷礼を受ける。

海峡は平穏、薄曇り、函館山にさしかかると、百隻のイカツケ船が出迎え、港内では飾りをほどこした停泊船が、定刻十八時三〇分着船に、一斉に汽笛を吹き鳴らし、安着を祝った。

しかし、そのわずか五〇日後の一九五四年（昭和二九年）九月二六日、台風十五号（台風マリー）のため函館港外で沈没、多数の乗客乗員を失う。これは「タイタニック号」に次ぐ世界第二位、わが国最大の海難事故である。

洞爺丸の事故（一）

・乗客（総数一一六七人、死亡一〇五一名、生存一一六名）
・乗組員（総数一一一人、死亡七三名、生存三八名）
・公務職員（総数三六人、死亡三一名、生存五名）
・総計（一三一四人中、死亡一一五五名、生存一五九名）

その他

第十一青函丸
船長以下九〇名殉職（救助なし）

北見丸
船長以下七〇名殉職（救助六名）

日高丸
船長以下五六名殉職（救助二〇名）

十勝丸
船長以下五九名殉職（救助十七名）

◆昭和二九年九月二六日◆

〈十四時四〇分〉出港予定

台風十五号接近中、他船からの乗客・貨物の積み替えに時間を取られたりして、出港のタイミングを逃す。本船テケミ（天候険悪出港見合わせ）となり乗客は乗船したまま出港を待つこととなった。

〈一八時三九分〉出港

函館港を出港（定刻の四時間遅れ）

〈一九時〇一分〉投錨（→機関機能停止）

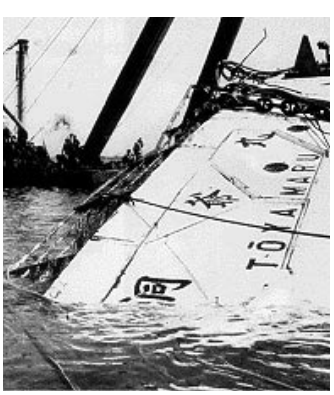
強風のため防波堤の外側一五〇〇メートル（函館湾内）の地点に投錨。しかし錨が効かず、函館港外の七重浜に向かって流され始める。同時に船尾開口部から車両甲板への浸水がその下の機関室に及び、焚火不能となる。

〈二二時二六分〉座礁

座礁（七重浜沖一一〇〇メートル、右舷に三〇度傾いた状態）。やがて発電不能となり、船内に闇が訪れる。

〈二二時四三分〉沈没

転覆、沈没（七重浜沖七〇〇メートル、水深わずか八mの地点）角度一三五度までひっくり返った。



洞爺丸の事故（二）

▼青函航路（海の上のレール）

青函航路は、本州と北海道のレールを結ぶ航路（見えないレール）である。ダイヤ通り運行しなければ接続列車に影響が出る。五分以上の遅れは「事故報告書」提出の対象でさえあった。遅延の理由が、たとえ悪天候（不可抗力）のためだけであったとしても報告書の提出は免れなかった。

▼台風一五号マリー（後に洞爺丸台風と命名）

一四時四〇分、洞爺丸は定刻に出港予定であった。NHK第一、正午のニュース後の天気予報では、「台風一五号は今日の夕方奥羽地方北部から北海道に達する見込み」とあり、洞爺丸船長は、津軽海峡が暴風域に入ったとしても、左半円（可航半円）であると考えていたと思われる。

▼本船テケミ（運命の二分間停電）

―洞爺丸出航せず―

台風の現在位置、進路と自船の耐荒天能力を計りにかけて船長は出港を決断した。しかし、他の船（洞爺丸より小型）が途中から函館港に引き返してきて、その乗客・貨物を移乗するのに時間がかかった。

やっと出港となったところで、船尾にかけた可動橋が上がらない。停電だった。船長は、「本船テケミ」（天候険悪出港見合わせ）と決定する。しばらくして可動橋は上がったが、テケミ取り消しはなかった。時に、一五時一〇分。停電したのはわずかに二分間であった。このとき出港できていればまちがいなく青森に着いていたであろう。運命の二分間であった。

▼二度目のドラ（悪魔の目）

一七時三〇分ころ、洞爺丸の出港予定時刻からすでに約三時間経っていた。今までの土砂降りの雨が嘘のように、西から南にかけて空が真っ青に晴れ上がった。台風の目だ。洞爺丸船長は確信した。他の連絡船船長や函館海洋気象台の予報官まで、だれもがそう思った。多少の吹き返しはあるかもしれないが、最新鋭の洞爺丸なら乗りきれる。

洞爺丸船長には、再開第一便としてできるだけ早くダイヤを正常に戻さなくてはならないというプレッシャーもあったであろう。こうして、船長は出港を決意した。このように、船舶の運航には船長が絶対的な権限をもっており、周囲から口をはさむことはできない、とするのが長い間の伝統と慣習であった。

ところで、だれもが見た〈台風の目〉は、実は閉塞前線のいたずらであった。本物の台風の中心は、その時、間違いなく函館西方の日本海上にあった。

▼異常台風一五号（北海道西岸を発達して北上）

毎年数多く発生する台風のうち、津軽海峡に影響を及ぼすまで北上する台風は、全体の一割程度である。それらのうち、北海道西方海上を北上して、津軽海峡が右半円（一般に危険半円と言われる）となるような台風は、さらに少なく、それまでで全体の一～二％しかなかった。いずれにしても、北海道付近に達した台風は、速度が急増して衰えるのが常であった。

しかし、台風一五号は違った。一五時ころ、青森県の西方海上で急速に発達、一七時ころ、渡島半島西側の日本海上（函館の緯度線上）に達し、速度を急速に落として（時速一〇〇km→四〇km図1Ⓐ参照）ゆっくりと北上していった。このような台風は観測史上一五号がはじめてだった。そしてこのような変化が起きていることに誰も気づいてはいなかった。

GHQ占領下の日本では気象観測網は貧弱であった。また、本格的台風と接する機会の少ない北海道で、予報官自身、台風予報の経験が少なかった。

▼函館湾（天下の良港だが）

天下の良港、函館にも欠点はあった。真方位二〇七度（真南は一八〇度）から二一九度（僅か一二度）の角度で日本海にその口を開いており、その対岸は遠く能登半島や山陰海岸になるのだそうだ。台風一五号が渡島半島西側の日本海上で発達・停滞することによって、函館湾には長時間にわたって南よりの強風が海から直接吹き込むこととなった。さらに、日本海で発生した波長の長い大きなうねりが函館湾内に押し寄せてきた。

▼船体構造（車両甲板上の滞水）

連絡船の車両甲板は海水面より高い位置にある。しかし、船尾開口部は解放されたままの構造であった。そしてここから海水が打ちこんできた。しかし、なぜ波の進行方向と反対側の船尾から波が打ちこんできたのか。

洞爺丸を襲った波は、波高六m波周期九秒と推定されている。まさにこの条件のときのみ、実験では海水の「滞留」現象が起きることがわかった。もし波高がこれ以上高くなっても、波周期が変われば滞水量は急激に減少する。

なお、実験の結果、このときの車両甲板の滞水量は二五〇トン以下で、復元力には影響なしと判断された。

▼座礁（安全か？）―真の沈没原因は何か

投錨から三時間二五分、浜に吹き寄せられ続けていた洞爺丸はついに浅瀬に乗り上げた。定年退職を一年後に控えた船長にとって初めての事故（それも大きな海難事故）には違いなかったが、これで台風との闘いはひとまず終わった。誰しもそう思った。数一〇〇〇トンもある連絡船が横転・沈没するなどということはまるで考えられないことだったのである。

洞爺丸が最初に座礁した地点は、海図上での水深一二mである。吃水五mの洞爺丸では通常は船底が届くはずはない。ところが、ここに台風の大波でかきまわされた海底の砂が浅瀬をつくっていた。これを漂砂現象という。

この浅瀬（幅三～四〇〇m）の上で安全に座州する前に、右舷のビルジキールが海底につきささり、横転して流されていくうちに深みに落ち込んだものと思われる。このため、平坦な場所でただ単に横倒しになったのならば、横転角度九〇度ですむはずのところ、角度一三五度までひっくり返ってしまった。（ビルジキールとは、船底の両舷湾曲部の縦方向に細長く突き出した鉄板で、横揺れを数一〇％押さえる効果がある）

参考書籍：上前淳一郎著『洞爺丸はなぜ沈んだか』・坂本幸四郎著『青函連絡船』・金丸大作著『写真集青函連絡船』・田中正吾著『青函連絡船―洞爺丸転覆の謎』

図1：台風15号の予想進路と確定進路

洞爺丸事故50周年を前に…

54期（昭和27年卒）金谷 稔

今回、第27回東京支部「親睦大会」に向けて映像製作を担当することになった。開校以来108年に及ぶ母校の歴史を、昨年市制80周年を祝った函館市の盛衰をからめて描こうと早々に狙いを定め、卒業以来全く疎遠だった同窓会に対する（年齢的に）最初にして最後のご奉公を…〝ぐらいの軽い気持ちでのスタートだった。

だが、資料を読み進むうちに重大な事実を次々と知り、ひどく厳粛な気持ちになっている。

発端は、来年で50周年を迎えるあの「洞爺丸事故」だ。初めて知った重大な事実の一つは、我らの魂の拠り所とも云える校庭のポプラがあの台風の結果すべて伐り倒されてしまっていたことである。学校近隣の住宅に迷惑を掛けないように！との配慮からだったそうだが、とても寂しい思いがした。

もう一つの事実は、もっと重いものだった。

洞爺丸と運命を共にした故船長のお嬢さんが、私と同期だったことを知った驚きである。

私の父も当時、青函連絡船の船長を務めていたが幸いにも事故当日は乗務が無く、東京の下宿に「父、大丈夫。心配無用」といった主旨の電報を貰って一安心したことしか憶えていない。

今回、50周年を目前にして、殉職された故船長のことや残されたご遺族のご無念、更には同期生であるお嬢さんの30代での夭折などを初めて知り、身の引き締る思いである。

映像を作ろうと企画した当初は、低迷する函館への応援歌を謳い上げよう！といった軽いノリだったが、今

坂本幸四郎著

「青函連絡船」の本より

―悪魔マリー―

この台風は、九月十八日、グァム島西方海上にできた熱帯性低気圧が発達したもので、二十一日午前三時、台風五四一五号・マリーと命名された。五四とは一九五四年（昭和二十九年）のこと、一五号は、この年に発生した十五番目の台風、マリーは米軍が使用していた女性名を表す。

台風十五号は沖縄近海から北東に進み、九州南端から豊後水道を通り、山陰を経て日本海に入った。

中央気象台の気象通報（ＪＭＣ）は、九月二十六日午後零時五十分の定刻放送で、次のように発表した。

「二十六日午前九時現在（図１・①参照）台風マリー、九六八mb、日本海南部、北緯三十六・五度、東経百三十四・五度の位置にあり、北東五十五ノット、中心より半径二百海里以内風速四十メートル以上、最大七十メートル、日本海および日本近海特に厳重な警戒を要す。二十六日午後九時の予想位置（図１・②参照）、北緯四十六度東経百四十三度と北緯四十二度東経百四十七度の間に向かうと思われる」

ノットの換算は、一般に、台風の進行速度などは二倍してキロメートルとする。五十五ノットは百十キロである。台風十五号の特徴は、大型で、その猛烈な早さにあった。

予想進路が東北北部から北海道全域になっている。予想位置にしてはあまりに広範囲だが、当時のＪＭＣはこの方式であった。

日本海には観測点が一つもないため、位置はすべて予想に基づくことになる。連絡船にとっての目安は、佐渡ヶ島である。佐渡ヶ島から津軽海峡まで、ほぼ五百キロ。この位置から、時速五十キロなら十時間、時速百キロなら五時間後にやってくる。その時の位置、示度、進行方向から、危険の度合が推測できる。

―運命の銅鑼―

死亡した乗客の遺族たちが口を揃えて批難したのは、台風の中、なぜ洞爺丸だけが出港したか、ということだった。午後四時三十分に青森を出港の予定だった羊蹄丸は岸壁でテケミのまま動かなかった。洞爺丸の後続船として函館を出る予定だった大雪丸はテケミを決め乗客を乗せずに沖出し、港内に錨泊した。貨物船は全船テケミをした。この夜出航したのは、洞爺丸一隻だけだった。

なぜ出航したのか。台風十五号に対する気象判断にかかっていたこと以外には、あり得ない。洞爺丸船長近藤平市の判断によっていた。

当時の制度は、一船にＡ・Ｂ二組の船員がおり、交代で乗船する。船長でいえば、Ａ組船長は乗組船長、Ｂ組船長は専属船長である。

その他に、予備船長がいる。Ａ組・Ｂ組の船長が休暇を取った時などに、代わりに乗務して航海責任を果たす役目である。一ヵ月前に全船の船長から休暇申請を受け付け、休暇日が重ならないよう調整する。予備船長は、したがって、ほぼ一ヵ月前に、代務として乗船する船を指定される。予備船長は、毎回異なる船に乗る。熟練した技術がなければ、努まらない。

近藤船長は明治三十二年生まれ、五十四歳であった。翌年には定年退職というベテランであり、船長経歴は十三年、羊蹄丸乗組船長を四年間努めた後、前の年、予備船長になった。

連絡船は入出港が激しい。ダイヤによる定時運航のため、多少の荒天や視界不良でも入出港を強いられる。岸壁に衝突したり、浮標にぶつけたりという軽微な事故は、どんな船長にも避けられない。

近藤船長は、その軽微な事故さえ、ただの一度も起こしたことのない、名船長だった。極めて細かい神経を持っていた。若い時から気象に強い関心を持ち、通信部からの気象通報を天気図に作製しては周囲に話しかけるので、「天気図」の仇名があった。

―空前の気象状況―

「九月二十六日、大平洋側の温暖前線の北上に伴い、それに先行して津軽海峡に二次的な温暖前線が発生し、午後一時頃に顕著になって北上し始め、北海道南部では扁東風が強まり、暴風雨となった。またその頃、台風の南側から南南西方に延びていた寒冷前線は、漸次、台風の東側に回りながら台風の進行に伴って奥州を東進し、同日午後四時頃、奥羽北部で閉塞前線となり、さらに午後五時頃、北海道の南端に達した。この前線の通過と同時に、各地とも、一時、扁東風が弱まり、次いで扁南の暴風に急変した。函館を閉塞前線が通過した午後五時過ぎ、同地では一部で空の晴れ間が認められたが、北海道南西海上で台風の進行速度が半減し、暴風域の南東象限が拡大したため、その後、道南地方に強い南西風が連吹した」

思わず長歎息が出る報告である。中央気象台は、この報告を二年後（昭和二十九年台風第十五号報告、気象庁昭和三十一年発行）に発表しており、調査解析にそれだけの日数をかけた難解な気象経過であったのだろう。それほど台風十五号は異常なものであった。批判論文はそのことについて、次のように述べている。

明治二十四年から昭和二十九年までの六十四年間の記録によると、台風の発生総数は九百六十である。このうち、日本海に入り三陸と北海道方面に影響を与えた数は百四である。さらに、このうち北海道の西岸を北上した数は十四である。

北上した十四のうち、北海道西岸で急激に速度を落とし、かつ発達して中心示度が下降したものはただ一つ、洞爺丸台風である。過去六十四年間の記録を破った空前のものであった。

海難審判の裁決では、台風十五号がかくも特異であり、予想困難であり、当時の気象予報が実況とどれだけ違ったかを十分に理解していない。そして、航海技術者に予報が誤りであると見抜く能力を求めるのは納得できない、としている。

『青函連絡船』より抜粋転載

著者、坂本幸四郎氏（函中44期・昭和17年卒）は元石狩丸・通信士として洞爺丸のＳＯＳを受信した。

は、改めて事故の全犠牲者に対する鎮魂の思いも十分に込めた仕上がりにしたい、と考えている。合掌。

実はこの原稿、書き始めはもっと運命的な匂いをもつものになる筈だった。というのは、私はつい最近まで、父は洞爺丸の船長だったと思い込んでいたからである。

ご存知の方も多いと思うが、青函連絡船には二班のクルーが交代で乗務していたので、洞爺丸の場合は奇しくも同期生同士の父が船長だった！これが、この話しの最大の売りになる筈だった。

ところが、資料によると洞爺丸の二人の船長職に父の名前は無く、殉職された船長も実は予備船長として、たまたまあの日乗務されたという不運が分かった。

私は男ばかり四人兄弟の三男だが、早速、兄と弟に電話し、当時の状況を確かめた。その結果、私たち兄弟四人は勿論、それぞれの家族全員が、今の今まで「父は洞爺丸の交代船長だった」と信じ切っていたことが判明。

笑い話のような、それにしては何んとも切ない事実だが、事故当時兄弟の中で唯一函館に住んでいた弟（当時は小学生だが）は、「予備船長だった父は事故前日に北見丸の乗務を終えて下船し、事故の翌日、同じく予備船長として洞爺丸に乗務する予定だった」と証言する。今となっては、もうそれを確認する手だては無い!!と云うより「これ以上、確認したくない」というのが正直な気持。ハッキリ云って、非常に複雑な思いである。

因に、父が事故前日下船した北見丸もあの台風で沈没した。いずれにしろ、父はやはり強運の人だったのか　と思うしか無い。

郷愁の「箱館」

45期（昭和18年卒）
田沼　修二

最近の町村合併で市町村の規模が拡大され、行政経費の節約が図られることは大変結構なことだ。しかし歴史に根付いた地名が簡単に消えようとする困った問題も起っている。

我々の故郷の函館も近く近隣の地域と合併する方向で調整が進んでいるようだが函館市の名が変わることはなさそうだ。

もともと函館の地名はアイヌ語では「ウスケシ（湾の端）」と言われていた。一四五四年に小豪族の河野政通が函館山の山麓に四角な館を築き、これが遠くから箱形に見え「箱館」とよばれるようになった。

天然の良港の箱館は一八五四年日米和親条約で下田と並んで、日本で初めての開港場として世界の歴史に登場する。続いて一八五八年、安政の五ヶ国条約で神奈川、長崎、新潟、兵庫と共に国際貿易港に指定され外国船で賑わった。

ところが箱館は戊辰戦争の最後の舞台となり、幕府軍の砦の五稜郭落城をもって戦いは終わった。

明治新政府は直ちに蝦夷國を北海道と改め、明治二年開拓使の出張所を「箱館」に置き、名も「函館」と改めた。しかし人々は箱館の名前を簡単に捨てはしなかった。明治九年、政府は公式文書に函館と書くように改めた。明治二年から九年までの七年間は箱館の名前にこだわり続ける市民と、何としても戊辰戦争のイメージを変えたいとする薩長新政府のせめぎ合いの七年間であったように思われる。必ずしも大義だけで勝った訳でもない新政府にとって、幕藩体制の旧いイメージの箱館の名前を消し去りたかったに違いない。共に国際貿易港に指定された下田、長崎、新潟はそのままの名前で残り、兵庫・神奈川は県名として残り、貿易の拠点は神戸・横浜に移った。つまりなぜ箱館だけが名を変えさせられたのか、薩長の戊辰戦争へのこだわりを見る事ができるようだ。

いま改めて文字を競べてみても「箱館」の方が字配りの品格からも「函館」より勝れているように見える。いまさら市名を変えることの難しさは理解できるだけに、争乱の中で変えられた「箱館」への郷愁を深くするものである。

わたしの決断

45期（昭和18年卒）
山本健二郎

五十九年前、昭和十八年春、旧制函館中学校を卒業して、上級校を受験することになった。函中入学時は下積みだった私が、三年生の時心機一転して努力、卒業時には八番に上った。数学が苦手で涙の出るほどがんばって、何とかきりぬけた。そのかわり英語の成績が良く、実力テストで、四年生の時、五年生の中に順位を上げ、私が五年生の時には、とうとうトップに躍り出た。

どこを受験するか、最初はなかなか決まらなかった。家が大きな店であったので、英語が得意なら、英語高商で有名だった小樽高商にしようかと思った。小樽なら近いし、親から遠く離れなくてもすむ。しかし、どちらかというと、文学好きで、父は、「お前は商人には向いていない」とよく言っていた。その上数学が苦手で、商業英語に加えて数学で苦しむのではないかと不安になった。それなら、旧制高校の方が向いていることに気がついた。

旧制高校は、一高から八高までの、いわゆるナンバースクールのほか、弘前、山形、水戸、浦和、静岡など、全国に数多くあった。弘前なら海を渡ればすぐ、近くていいと思った。仙台の二高も考えた。しかし、東北には行く気がしなかった。戦争が激しくなり、食糧事情も思わしくなく、とても大都会には行けない。そこで、東京の一高や京都の三高は受験しないことにした。

このような時、函中の同期生で、四年生から金沢の四高に入った秀才の友人が、「四高に来ないか」とすすめてくれた。金沢なんてとても遠いし、知人もいない。その上文化的には関西系で言葉も上方に近いと聞いていた。どうしようかと思ったが、とにかく加賀百万石の城下町であり、地理的には京都、大阪、奈良に出やすいし、もともと英語のほかに得意だった日本の古典文学、之はひょっとしたら正解ではないかと思った。後年、親の反対で東大の英文科を断念して国文科に入った私だけに、「そうだ！金沢の四高に決めた」と大決断した。

親はびっくりしただろう。すぐ近くの小樽とか弘前には行かず、遠く離れた北陸の加賀の金沢に行くと言い出したのだから。今考えても申し訳ないと思っている。その上、私は法科や経済には向いていなかった。文学部なんて一寸贅沢な方が好きだった。四高受験時から、すでに東大の英文科に進むつもりだったのだ。私の英語はもともと地味で、文法が好きだったし、また英米の古典文学を愛好していた。四高時代に、坪内博士訳のシェークスピア全集四十巻を読破し、かなりの量のものを読んでいた。函中四年、五年と担任していただいた、英語の橋本文夫先生が、「お前には地味な英語学が向いている。カレントイングリッシュは向いていない。会話など実用英語には苦しむだろう」と忠告してくれた。その通りだった。

四高に入ったら、函中の大先輩で、ハックスリー、モームなどの大権威、上田勤先生から親しく教えを受けた。函中時代に、教科書のほかに読んでいたイギリスの古典が、大いに役立った。嬉しかった。それだけではない。国語の先生方の中に、江戸文学を得意とする江湖山恒明先生がいらっしゃった。とにかく、函中時代、江戸の擬古文、雅文が大好きで、その方面の珍しい作品も知っていた。後年、東大の国文科に入ってから、近松、西鶴、秋成、三馬、一九などを味わう下地も四高時代に出来ていたのだ。東大では近松の世話物を読んで卒論を書いた。

四高時代は楽しかった。一番よかったことは、入試には数学があっても、文科に入ってしまうと数学がなかったことだ。また、夜行ですぐ関西に出られて、京都、大阪、奈良を歩き回った。何かにつけて恵まれていた。金沢の四高にしたあの大決断こそ、私の人生体験での大ヒットだったのだ。

タウン誌「街」より抜粋掲載

呉服商たたきあげの強さ

51期（昭和23年卒）
早坂　茂三

ぼくのオヤジは黙々と努力する人で、愚痴はこぼしませんでしたね。子どものころは貧しく、高等小学校を出て呉服屋に奉公に。そこで生地の目利きを学んだのでしょう。ぼくが小学校に入るころには、函館で五指に入る呉服屋を構えていました。函館は当時、北海道の表玄関。活気に満ちていました。

戦中、ぜいたく品が禁止され呉服が売れず、会社に勤めていました。おやじの強さを知ったのは戦後です。戦争で家も店も失いましたが、敗戦から10日もしないで、自転車に軍の服や傘を積んで、昔の得意先を回り始めました。

そのころ、ぼくは文学少年。終戦の前後で新聞や教師の言うことが一変し、勉強する気になれなかった。兄が幼いころ海でおぼれて亡くなり、ぼくは成り上がりの長男。期待は大きかったはずですが、二浪しても何も言われませんでした。いつかは勉強すると思っていたのでしょう。

ぼくが目覚めたのは、一九四八（昭和23）年の雨の日。自転車に洋傘をたくさん積んで、かっぱを着て出かけるおやじの姿が窓から見えたんです。「手伝うよ」と声をかけたら、「これはおれの商売。お前の商売は勉強だ」。それからは必死で勉強し、早稲田大学に入学できました。

卒業後、呉服店を再興していたおやじは「商売を教えてやる」と言いましたが背を向け新聞記者になりました。誤算だったでしょう。

仕事に慣れたころ、両親を箱根に招待しました。奮発してホテルのスイートルームをとると、おやじは「高いだろう。無理しなくていいぞ」と心配するんです。ぼくは「これぐらいできるようになったんだ」と強がりましたが、本当はボーナスの前借りでした。夜は、おやじとふろに入りました。やせていました。あとで「いろいろ連れて行ってもらった」と、うれしそうに話していたそうです。

田中角栄自民党幹事長の秘書として、全国を駆け回り圧勝した69年の総選挙の投票日翌日、おやじは72歳で亡くなりました。その時、日本人が失いつつある、たたき上げの強さを、角さんとともに教えてくれたことに思い至りました。

朝日新聞「おやじのせなか」の記事から転載。
早坂茂三氏

函中卒業後、早稲田大学から東京タイムスに入社。政治部記者時代に転職。故田中角栄元首相の秘書を23年間務めた後、政治評論家として活躍、「おやじの知恵」など多数の著作がある。白楊同窓会はじめ、道南会顧問、東京東川会名誉会長として函館の活性化に尽力されている。

箱館開港(2) 25号のつづき

壹

◎ザビエルが伝えたキリスト教は禁圧され、それを逃れ蝦夷地に安住の地を求めたキリシタン百六名が千軒岳で殉教（一六三九年）いたしましたが、当時はまだ禁制が解かれていない時代でした。

二〇〇〇年の歴史の中で、地球をそれぞれ巡ってきたキリスト教がアメリカからプロテスタント、フランスからカトリック、ロシアからハリストスなどが、箱館の一寺院の山門を通って日本全国に広がって行きました。

言語・生活・信仰など異なった文化を持つ異民族との交流の舞台として箱館の仏教寺院が果たした役割には、はかり知れない歴史的意味が託されていると思います。

この五月、ローマ法王は千年の時を越え初めてアテネを訪ね、ギリシャ正教に謝罪し和解を求めました。人類の平和のために果たすべき宗教者の責務を訴えた法王の意志と行動が、すでに百五十年前の箱館において実践されていたことに驚かされます。

◎外国との交流を通して養われた箱館人の精神は、近代日本の幕開けに様々の影響を与えながら引き継がれて行きました。

フランスとの交流で得られた築城技術（仏・ボーバン型）は五稜郭を完成させ、幕府の近代化を目指した軍事組織はフランス式で教育されました（仏軍事顧問団は箱館戦争にも参戦）。戊辰戦争（一八六八年）で箱館に逃れた榎本軍は、ここ五稜郭で「蝦夷共和国」宣言を行い、選挙制度も取り入れておりました。幕末期の日本がフランスから受けた影響は「自由・博愛・平等」を掲げた近代国家日本建設の永い道程の輝かしい序章であつたと思います。

◎これらの箱館の新しい精神は一八六九年（明治二年）箱館戦争における博愛的思想と行動に引き継がれていきました。

「高松凌雲」は幕府の命によりパリの病院で医学の研鑽していたが、大政奉還の報を知り急遽帰国し、品川沖に停泊中の軍艦に乗り脱走軍に加わり箱館にやってきます。やがて箱館戦争、凌雲は敵・味方の区別なく負傷者の治療にあたりました。フランスで学んだ博愛精神が、凌雲により実践された函館は、日本における「赤十字運動」の発祥の地と呼ばれました。

◎**「柳川熊吉」**は江戸の侠客で幕府の命を受け、一八五六年（安政三年）箱館に渡りました。多数の子分を持ち口入れ業を営み、箱館はもとより蝦夷地の奥にも影響力を拡げ、市内の治安・消防にも携わり、五稜郭築城にも貢献しました。明治二年五月、箱館戦争は榎本軍の敗北で終わり、幕府軍戦死者の屍は、新政府軍の報復を恐れ

五稜郭は、もともと徳川幕府の箱館奉行所であった。では、なぜ奉行所が城郭（城）を必要としたのだろうか。その背景には、幕府が一八五四年に締結した日米和親条約による伊豆・下田と箱館（函館）の開港があった。五稜郭は外国船からの防衛と、その監視を目的に建築されたのである。その立地を見ると、函館の港と外洋の両方を見通せる場所が選ばれており、洋式の城郭とされたのは、外国船の砲撃に対抗するためと考えられる。

建築は一八五七年に始まり、六四年に完成している。蘭学のほか、西洋の多岐にわたる学問に精通していた武田斐三郎による設計で、自ら陣頭指揮をとったという。箱館戦争は五稜郭完成の四年後のことである。

て放置されたままでした。

この処置に義憤を感じた熊吉は「死ねば、みな仏、敵も味方もない」と実行寺住職と諮り、密かに八百余名の遺体を収容し実行寺山内と山背泊に埋葬いたしました。その後、七回忌にあたる一八七五年（明治八年）当時の陸軍奉行であった大鳥圭介らの手により、幕府軍戦没者の霊を弔うため「碧血碑」が建てられました。（谷地頭町・函館八幡宮隣の地に）

◎箱館戦争終了後、市民は幕末期の精神を受け継ぎながら、新政府の政策の推進に積極的に努めました。明治、自由民権運動の高揚期、帝国議会開設に決定的役割を果たしたのは、熱い思いを持った函館の新興商人の運動であったといわれています。

かつて函中の名物先生、高島小太郎先生の講義で学んだ諸先輩も多いと思います。こうして、函館の精神は20世紀に受け継がれて行きました。20世紀は結果的には戦争の世紀といわれ、人間の愚かさと智恵の葛藤の時代でもありました。そのような時代の一八九五年（明治二八年）函中の歴史が始まりました。

◎幕末から明治期、函館の街並みは洋風建築が多く建てられ、民家は一階は和風、二階が洋風という独特の町並みが形成され受け継がれています。

大火が多かった函館は、昭和九年以後、耐火構造のコンクリート建築が求められました。

函館の風景を想う時、ほとんどの皆さんは港を望む景色の中に、ひときわ高くそびえる黄色い建物「森屋・百貨店」を想い描く事でしょう。これは「バウハウス建築」の最高傑作といえる20世紀を代表する建物のひとつであると私は思っています。

「バウハウス」とは一九一九年ドイツで創設された美術・工芸を統一して、新しい産業文化の創造（建築・工芸・デザイン等）を目指した教育機関で、世界で活躍する優れた人材を排出したが、保守的政府の圧迫で一九二四年（大正一三年）末に閉鎖、ナチスにより一九三二年（昭和七年）解散させられました。その後この理念はアメリカに伝わり今日の生活・産業デザインの発展の基を築きました。大きな窓と円窓を配した直線的構造の斬新な建築は、大火後の学校建築に生かされました。弥生、青柳、東川、大森等の小学校にその特徴が見られます。

第一次から第二次世界大戦への狭間にあって取り入れられ建設された「森屋百貨店」ビルは、当時の函館商人の先見性と情熱、エネルギーを知るに充分な20世紀のモニュマンといえます。

◎ピカソが描いた「ゲルニカ」や映画「誰がために鐘がなる」でご存じのスペイン戦争が一九三六年（昭和一一年）に起こり、ヒットラー・ドイツとムッソリーニ・イタリアと手を組んだフランコに抗した共和国側支援のため国際義勇軍が組織されました。

「ジャック・白井」はアメリカ人義勇軍「リンカーン大隊」の一人として参加、マドリードの近くのブルネテで一九三七年七月一一日戦死しました。日本人ではただ一人でした。

「ジャック・白井」は当別のトラピスト修道院付属の孤児院で育ち、小学校卒業前に脱走し函館でしぶとく生き、やがて英国船でコックとして働き、ニューヨークでアメリカに密入国、世界恐慌の中のどん底生活を味わいます。日本レストランでもコックとして働きましたが「ジャック・白井」と名乗り、函館出身であること以外は語ることがなかったといいます。

国境を越えて人間の生き方を鋭く問う、彼の答えは、函館で芽吹き貧困にあえぐ移民たちの坩堝のニューヨークで養われスペインでの死の姿に認められます。

彼の心の底流にはトラピスト修道院時代に育まれた犠牲的人間愛の魂が息づいていたのではないかと思います。

世界的視野で時代を直視し、真理のために生命をかけた日本の一青年の生き方は函館人の誇りであると思います。（彼の墓標には〝彼の故郷に敬意をよせ、彼の勇気をたたえて―〟と記されたそうです。）

ジャック・白井（左下）をモデルにし

◎今年（二〇〇〇年）は新世紀元年、世界中の人達が夢と希望を託して迎えたはずの21世紀でした。

しかし、前代未聞のニューヨークテロ事件をはじめ、宗教対立や民族対立の激化、戦争や貧困の増大等、人間の愚かさに対する失望や苦悩を抱えての21世紀の幕開けを迎えました。

このような時、あらためて函館の歴史を見つめた時に、実はそれを克服するための大きな〝証し〟を函館の市民はすでに百五十年も前に経験していたということです。この事実こそが「21世紀へのメッセージ」であると言えます。ですから函館の魂が本当の意味で世界の平和にしっかりとつながっていることを意味します。

◎皆様が故郷函館を想う心の中に、実はその不偏的精神が息づいているからこそ熱く燃えておられるのだと思います。時代がいかに変わっても、失われる事のない先人たちの魂がしっかりと受け継がれているからこそ、故郷への愛と誇りが時とともに大きく膨らんでいるのではないでしょうか。

函中時代、〝遥かなる真理の彼岸〟を、共に歌った青春の想い、その中に函館固有の先人達の不偏の生命が脈々と生きていることに気付かされます。

◎幕末期　箱館からヨーロッパに運ばれた「はまなす」はヨーロッパの「バラ」と交配され飛躍的改良がなされ、生命力を増した大輪のバラがつくられました。

今日、世界中で愛されている花の女王「バラ」の生命の中に函館の光や空気、風土に培れた〝函館の生命〟が自分の生命と同じように脈々と息づいているのです。

一輪のバラに込められた〝函館の生命〟それは〝万象の不滅の生命〟の相を私たちに証してくれています。

◎人はだれでも遠くにあって故郷を忍ぶ時、かつて過ごした光景に思いをはせます。

函館人の原風景である教会群を中心に形成されている西部地区の歴史的景観は日本中の人々の注目を受けています。単なるエキゾチズムを越えた心の魅力にひかれるようです。

仏教寺院とキリスト教会が並んで建ち、愛と慈悲の祈りが込められた歴史的景観、それは函館が世界に誇る「平和の祈念碑」と言えましょう。

この記事は平成13年の親睦大会での講演内容をまとめたものです。前号で全文掲載出来なかった後半部分を本号で続けさせていただきました。

ハマナスの花

将棋界発展に尽力
二上達也氏

1932年（昭和7年）、函館生まれ。17歳でアマ名人戦北海道代表に。函館高（現函館中部高）を卒業し、故渡辺東一名誉九段に入門。50年、四段。56年、八段。63年、大山康晴王将（当時）を破り初タイトル。タイトル獲得は棋聖4期を合わせ計5期。終盤に強く「寄せの二上」と呼ばれた。90年、現役引退。2002年勲四等旭日小綬章を受章。

一九八九年から日本将棋連盟会長を務めてきた二上達也九段が五月に勇退した。7期14年の在任期間は、故大山康晴15世名人の6期12年を上回り歴代最長。趣味の多様化や不況の影響で難しいかじ取りを迫られる中、女流棋戦を新設するなど将棋界の発展に取り組んだ。「若い棋士は普及活動に力を注いでほしい」と話す二上九段に、将棋界の課題や現在の心境を聞いた。（道新記事より転載）

Q：まず、肩の荷を下ろした気持ちを。

「14年は長過ぎた。会長になった時はせいぜい6年か8年と思ってましたから。何か問題が起きれば責任を取らなければならないので、気は楽になりましたね。これからも相談役として将棋界にはかかわっていきますが、心のどこかにすき間ができたような気はします」

Q：会長として最も苦労したのは？

「新聞社などスポンサーとの契約交渉が大変でした。なるべくたくさんお金を出していただくのが会長の役目ですが、就任当時と違い、不況が続く最近の情勢では難しい。具合の悪いことに経済界のトップは囲碁に顔が向いていることが多い。われわれの努力も足りないのですが、あるテレビ局との契約が打ち切りになったことなど、心残りの点はあります」

Q：将棋界発展の鍵は、ファンの拡大でしょうか。

「とにかく大勢の人に日本の文化としての将棋を理解していただくしかありません。ただ、普及といってもこれが意外に難しい。アマチュアの指導をするよりは、目の前の勝負に集中したいという棋士が多いのです。私がこの世界に入った昭和二十年代の中ごろは対局だけでは食べられず、指導のほうが中心でした。でも今はタイトル戦が増え、棋士の待遇も良くなった。歓迎すべきことですが、長い目で将棋界の発展を考えた場合、棋士は発想を転換する必要があると思います」

Q：女流王位戦や倉敷藤花戦を始めるなど女流棋戦に力を注いだのも普及のためですか。

「人間の半分は女性ですからね。それに、お母さんが将棋を覚えてくれると、子どもにも伝わりやすい。最近は礼儀を身につけさせるために将棋を教える親も増えているようです。女流棋士にはもう少し頑張ってほしいですね。チャンスは与えているのですが、男性棋士との実力差がありすぎます」

Q：新会長には永世名人の資格を持つ中原誠永世十段が就きました。かって、女流棋士とのスキャンダルもあり、納得できない人もいるかもしれませんが。

「それは週刊誌の読み過ぎだと思いますよ。ただ、中原君については、将棋しか知らず、世の中の仕組みについて疎かった面がある。将来会長になるという自覚があれば、もう少し身を慎んだとは思いますが…。ただ、名人の肩書を持つ者が次の将棋界を引っぱるという暗黙の了解があります。棋士の集まりなので実力がないと、みんな言うことを聞かない。一目も二目も置かれる人じゃないとうまくいかないという事情があるのです」

Q：ところで、お弟子さんの羽生善治四冠は相変わらず強いですね。

「弟子は十人ぐらいいたのですが、ものになったのは羽生だけ。私の放任主義が羽生には合ったのですが、ほかの子には良くなかったようです。羽生には四段になった時に、『いろんな本を読め』と言ったぐらい。あんまり勝つので、少しは遠慮しとけと思うのですが、これぱっかりは持って生まれた勝負運なのでどうにもなりません」

Q：次代を担う若い棋士にはどんなことを期待しますか。

「将棋界をどう盛り上げていくか、切実な問題として考えてほしい。私も三十代半ばから役員をしましたが、若い人はもっと積極的になっていい。いろいろな考えを持っているとは思うのだが、声が小さいのです。もっと上に向かって意思表示をしてほしいですね」

Q：今後は、どんな日々を。

「今は高校の同窓生との付き合いが一番多いですね。酒、カラオケ、ゴルフ、囲碁。昔ほど無理はしないけれど、趣味はいろいろあります。ただ、将棋指しは一生、将棋指しなんですね。指導対局をしてもつい本気になって勝ってしまう。教える立場としては良いことじゃないけれど、これがけっこう楽しくてね」

第42期・高楊会

安富隼平 記

高楊会東京支部は傘寿祝を最終の会合とし、以後は毎年一回会員の近況をとりまとめて、函館高楊会（世話人代表村上健介）に送っている。函館高楊会は毎月第一水曜日に月例昼食会を デパート六階レストラン別室で開き、集まりを楽しんでいる。又毎年七月物故者法要を大野円通寺（同期生住山實道住職）で行っている。4月26日現在会員の現況次のとおり（高楊会だより第46号）現会員76名、逝去125名（うち戦死者25名）不明27名、合計228名。

第45期・翠楊会

田沼修二 記

翠楊会は卒業60年目に当たり全会員が喜寿を超えた目出度い年を迎え、14年9月24日に記念総会を湯の川温泉で開いた。現在の会員数は154名だが参会したのは地元函館18、札幌12、東京10の合計42名であった。卒業以来という再会もあり、60年の歳月を心行くまで懐かしんだ。この機会に同期会解散の声もあったが、なお暫らくは継続して友情の絆を暖めていくことになった。

翠楊会東京支部の総会は例年通り6月21日（土）表参道のNHK青山荘で開いた。今年は体調不良や他の行事との重複などで13名の参加に止まった。会は記念総会の報告から、60年前の思い出や参会者の近況報告と話題は尽きず、散会後も喫茶室に持ち越す程であった。次回からは他の行事と重複を避け、一人でも多く参加できるよう工夫することとし、再会を約して散会した。

第49・50期 東京九十九会

伊東克朗 記

九十九会は、昭和62年に卒業四十周年記念誌『集滴』を刊行しているが、このたび『時空を超えて』を上梓した。大平洋戦争終結の昭和20年に最上級生であった我々の勤労動員記録で、軍関係在籍者の記録なども交えて240頁、47名が執筆している。

動員体験は会員の紐帯の一つでもあるが、今回の呼びかけは愛知の山矢良君。二年前の総会で了承を得、会員に檄を飛ばし、編集発行を一人で成し遂げたといっていい。山矢君の熱意と努力にはただ頭を下げるのみである。

4月10日、東京九十九会の一泊旅行をかねて、山梨県石和温泉ホテル八田で刊行記念会が催された。総勢は、帯広から愛知までの同伴6名を含む32名の多士済々。卒業以来の顔もあり、半世紀以上昔の共通体験を肴に、深更まで歓談が尽きなかった。

今年も、東京九十九会は、12月の第三木曜日を忘年会に予定している。多くの会員が元気で参加するよう期待している。

この原稿の執筆中に、終戦時厚岸方面の動員の引率責任者で、今回の記録誌に寄稿も頂いた浜岡栄一先生の訃報に接した。心からご冥福をお祈りする。

第51期・あずまし会

三國比左男 記

あずまし会総会・懇親会を、4月12日午後4時から日比谷「聘珍楼」で開催した。

出席者は僅か15人であったが、一昨年頚椎靭帯の大手術をした会長の柴田啓次、昨年肺がんと前立腺がんの大手術をした早坂茂三両君が元気な顔を見せ、金沢大学名誉教授田辺宗一君が、自ら手がけた和英中辞典（研究社第5版）を引っ下げて参加してくれた。

話題はとかく病気のことや、111人となった同期の物故者のことに集中しがちであったが、出席できなかった平野拓夫君（第16回東京支部総会の講演者）が、4月1日金沢美術工芸大学学長に就任という明るい話もあり、アッという間の3時間半だった。

なお、元気どころの数人は、二次会に銀座へ繰り出したらしい。

第53期 故横田忠康先生をしのぶ会

佐々木順一 記

平成15年7月9日、函館国際ホテルにおいて、横田先生を偲ぶ会が開かれた。

函中3年時と中部高校3年間の計4年間、先生の教えを受けた53期生が中心となり、演劇部、野球部のOBたちが世話人となって運営された。

当日は先生のご薫陶を受けた函館在住の中部高校卒業生や札幌からの参加者もふくめ約100人が集まり、それぞれの思い出を語り合い、最後の別れを惜しみました。

平成14年3月10日、先生の長女の住む京都へ転居して治療に当たられたが、10カ月をこえる寝たきりの入院生活を続け、今年3月22日老衰のため永眠。享年86才でした。今は函館市東山の墓地に眠っておられます。

大正6年函館生まれ。昭和10年函館中学校を卒業して、二松学舎に入学。国文学、漢文学、中国語専攻。昭和14年満州国陸軍士官学校教官となる。昭和21年8月満州から引揚げ函館に戻る。昭和22年春から母校函館中学校の教師とな

る。昭和55年定年退職。在職33年。

昭和22年国語の時間、徒然草の講義において、つれづれとは、「することがなくて退屈なので」という解釈と「心の中に焦燥をもっているけれど、それを抑えて退屈なふりをする」という解釈もある。この講義は、57年の歳月を経た今日でも鮮明に記憶されています。以後、私は物事を検索する手法に応用して重宝しています。

また、シャーロック・ホームズの探偵小説の構成、組み立ての方法を解説してくれたおかげで、ホームズの愛読者が急増したことを思い出しました。しかも、頭を整理するのに探偵小説を読むとか、問題が完結する映画を観ることが役立つと教えてくれたので、私は学期末試験の前日には、かならず映画を観る習慣がついてしまいました。

先生の訃報に接した3月22日と7月の偲ぶ会の報せを受けて、私ども函中、中部高校の生徒にのこしてくれた先生の多くの遺産について今さらながら讃嘆と追慕の念を新たにするものであります。

担任の生徒たちと

第54期・福岡バージョン

佐藤正郎 記

事の起こりは去年の同期会。福岡で単身赴任のキューノ君が提案。「オレは来年度一杯で定年、来年の同期会は福岡でやろう。」ノリの良い54期。直ちに決定した。

西鉄グランドホテルには、静岡からのサトウ君と奈良からのウノ君がすでに到着していた。バスで雨降りしきる柳川。ここで白秋の生家と記念館を訪ねて、太宰府へ。夕方の雨で境内は人影も疎らだったが、それだけに天満宮は尊厳の雰囲気に包まれていた。

ホテルでの宴会は札幌からのヨシダ君、ハコさん、ノブエさんを加えて15人。宴たけなわでイシザワ君が札幌から駆けつけた。歓声がひときわ高まる。

翌日、西南学院キャンパスで北條時宗の命による防塁の遺跡に元寇の昔に思いを馳せ、更に有田へ。ここでは大陶磁器店のご令室（キューノ君の弟子のご母堂）にご案内いただいた。

柿右衛門、今右衛門、源右衛門を有田の三右衛門といい、現在も子孫が工房をもつ。各々特徴があって面白いが、手の出る値段ではない。五月連休の陶器市は壮観の一語につきる由。

参加者はやや少なかったが充実した一泊二日だった。キューノ君と弟子、有田のご令室に心から多謝。来年の会場は東京である。今年参集した仲間も、来れなかった仲間も、ぜひ元気でいてほしい。そして来年、また会おう。

第60期・函中三・三会

北原耕太郎 記

函中第60期昭和33年卒業、依って函中三・三会と称する。

6月21日湯の川温泉湯の川グランドホテルにて卒業45周年記念全国集会を開催した。集まったのは、恩師3名を含め、何と106名。地元函館の幹事団10名の諸氏のお骨折りの賜物である。本州からは、水津秀夫君の航空券手配のお世話もあり、35人もの参加となった。

まずは、当日ご出席いただいた懐かしい恩師、黒澤耕生先生（札幌市在住・2組担任）吉田信一先生（埼玉県在住・5組担任）野田修三郎先生（函館市在住・6組担任）にご挨拶いただいた。

先生方は大変お元気で、それぞれ45年前の授業を思い出すお話ぶりであった。60才を超えた我々生徒の方からは、「俺たちよりもお元気だよー。」と感嘆の声があがった。

ご出席を楽しみにしておられた浜岡栄一先生は、全国集会の直前5月15日に急逝された。91才であった。7組ガッツ会のメンバーには痛恨の極みであった。

浜岡先生、近年亡くなった笹本征一郎君、大建二郎君、中村弘志君、畑中輝夫君をはじめ物故者全員の方々のご冥福を祈って、全員で黙祷した。

「朋の最遠方より来る」九州は佐賀県からの中角久典君の力強い乾杯の発声により、開宴となった。

佐々木琢磨君の中締で一次宴会を終えた後、幹事の設営による二次会は、ホテル内のバーで、それでも足りないメンバーは部屋に集まり三次会と、大いに「青春を謳歌」したことである。

企画に始まる準備、名簿作成、「文武両道懐かしの中部3年間」と銘打たれた20頁に及ぶ資料（私達の中部高校合格の新聞発表記事のコピーまであった）の配布等々、地元函館の幹事さん本当にありがとうございました。

青春に戻った楽しい2日間でありました。3年後また元気で会いましょう。

第60期・ガッツ先生墓参の記

石渡悦子 記

5月15日、浜岡栄一先生が91才で亡くなられました。

6月21日湯の川グランドホテルでの、全国函中三・三会出席の前に、函館在住田村堅吾さんの案内により、紅谷弘一さん、松田栄美子さん、山根信子さんと5人で、浄土真宗大谷派函館別院船見支院へお墓参りに行って来ました。その際紅谷さんから心のこもったお経をあげていただき、先生もさぞ喜ばれたのでは…と存じます。

先生の眠っておられる御廟（ごびょう）は高台にあり、函館港が一望出来る見晴しの良いところにあります。

人生の師でもあり、日々心の拠りどころとしてガッツ先生の存在が大きかっただけにとても残念でなりませんが、来年は先生の一周忌の会をとの声もあり、まだまだガッツ会は続けられそうな気配です。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

第61期・活動状況

金子公彦 記

61期は、二〇〇二年の会費納入者数は48名に及び、当同窓会では最多の期となっております。私共の期は、同期会活動に皆さん大変協力的であり積極的な方々が多く、活性化されていることが、同窓会活動へも波及しているものと思っております。

二〇〇三年に入り、1月17日の年間行事計画会議では前年同様に様々なイベントが計画されました。勿論この他にも年2回の道南会や計画された各種行事の準備会、地方からの上京者を囲む会など小さな会合は頻繁に開催されています。

せっかくの機会ですので、二〇〇三年のとっておきの行事を紹介します。11月7～8日北海道から有江良久先生と佐久間政弘先生をお招きし、益子焼窯元、日本酒蔵元、花王栃木工場、袋田温泉宿泊、袋田の滝、竜神大吊橋、西山荘庭園などへ行くバスツアーを計画しております。定員30名で募集しました結果、8月1日現在44名の参加申し込みがあり、幹事の三上さん、藤田さん始め実行委員はてんてこ舞いをしております。是非素晴らしい会にしたいと皆さん頑張っています。

私共は、「何時までもあると思うな若さと健康」を肝に銘じ、元気なうちに大いに楽しむことをモットーに活動しております。気のせいか、行事参加の皆さんは若返ってお帰りになるようです。

第65期・函中三八会

菅原大作 記

函中三八会は、7月5日（土）と6日（日）の両日、東京・文京区本郷の〝鳳明館〟で行われた。

今年は、昭和38年の卒業から、ちょうど40周年になるのを記念して、初めて一泊二日で実施した。宿泊先の鳳明館は、明治末期創業の歴史ある純和風旅館。建物は、文化庁の登録有形文化財の指定を受けている。

今年は、25人（男性16人、女性9人）が参加。うち7人が宴会のみ出席、残る18人（男性10人、女性8人）が宿泊した。今年の遠隔地からの参加は、仙台市・木村（三浦）勝子さん、南アルプス市・栗田（川田）志津江さん、つくば市・高野晃氏、高萩市・田所（坂口）ナミ子さん、前橋市・西田守氏の5人。

初日、5日の午後6時30分からの宴会は、和室の大広間で行われ二の膳つきの箱膳を前に座布団。風呂上がりで浴衣掛けの人もいて、落ち着いた、本当にあずましい雰囲気の中で行われた。

乾杯後、しばらくたって各自に自己紹介を兼ねた近況報告をしてもらったが、体調を崩して出席するのを迷ったという人や間もなく迎える定年退職後の生活設計、子どもや孫の話など、40数年前の修学旅行からの思い出とは遠く離れた話が続いていた。

旅館側から、宴会の終了時刻は設けておらず、何時までででも続けて良いと言われていたものの、泊まらずに帰る人もいる関係で、午後九時過ぎ、全員での記念撮影を行って、宴会を終了。帰宅組と宿泊組に別れた。

宿泊組の18人は、二次会を女性の泊まる5人部屋に全員が集まって、昔の修学旅行を再現したように、互いに夜の更けるまでつきない思い出を語り合い続けた。

翌6日は、朝食後、自由解散としたが、数人ずつのグループに分かれて、近くの名所旧跡などを散策したりしていた。

なお、参加者には、欠席者から届いた近況報告と、最新の住所録を配った。

第68期・よいよい会

木戸正文 記

「よいよい会」今年（平成15年）は白崎淳一郎君の設営で屋形船での開催になった。

6月14日18時、品川高輪口集合、徒歩で屋形船中金へ、1艘貸切で乗り遅れなく無事出港。お台場沖で東京タワーや高層ビルの夜景と隅田川上りを楽しみながら近況報告と懇談、函館から田島隆和君、奥野君が、宇都宮の村上朝子さん、仙台の田村良二君が参加してくれた。てんぷらにお酒の飲み食い放題、カラオケのし放題と大いにもりあがった。

今回出席できずに近況報告を寄せてくれた皆のはがきを回覧し、またイントラネット上に「よいよい会」のホームページを作ったことを報告。

（http//4141kai.intranets.co.jp）

出席したのは大河原、雨宮、塩田、麻田、吉野、村上、細野、永田さん、荒谷、池端、奥野、及能、小林、白崎、相馬、田村、武内、田島、丸山、目黒、山本君。

また元気で楽しい噺を楽しみに再会を約束して散会とした。

なおホームページへの会員登録を行いたいのでまだの方は事務局長の武内隆君へアクセスをお願いします。（user3706228@aol.com）

第70期

幹事一同 記

昭和43年卒業生のうち関東近辺在住者は約120人ぐらいです。東京での同期会は2年に1回のペースで開催しております。前回は平成14年5月でしたので、次回は平成16年5月22日（第4土曜日）を予定したいと考えております。参加者は毎回30人ぐらいであり、誰とでも気軽・自由に懇談できるよう立食形式で行っております。（椅子もありますので適宜座ることもできます。）

なお、参加者に近況報告等のスピーチは特に求めておりません。もちろん、スピーチしたい方の発言をお断りするということではありません。どちらのタイプもお気軽に参加してみてください。

潜在的な参加希望者は50人以上と思われますが、仕事や家庭の都合から残念ながら涙をのんで欠席せざるを得ないという方々が毎回少なからずいらっしゃいます。

人生85年とした場合あと30年残されている勘定になるわけですが、近い将来には社会的、家庭的役割を徐々に喪失して孤独化進行の宿命を背負っております。幹事グループとしては、同期生の集いを一つの楽しみとして参加してくださる方がいらっしゃる間は、開催を継続していきたいと考えておりますので、ご支援方よろしくお願い申し上げます。

第71期

加納元雄 記

第71期同期会大会は、6月28日（土）4時から、銀座八丁目の「炭火ビストロ　盛焔　銀座店」で、行いました。

出席者は二次会からの参加も合わせて38人。今年の初参加は、川淵（現、藤村）裕子さん、斎藤太七郎君（以上、2組）、野路（現、

平成14年9月以降の会費の振替用紙のメッセージから

◇今井　清（40期・昭13年卒）
東京白楊だより第25号、函館今昔の写真などを興味深く懐しく拝見しました。

◇相馬　正樹（40期・昭13年卒）
14年12月から住所が変更になりました。〒225-0024　横浜市青葉区市ケ尾491-10　TEL　045-972-9070

◇坂井　一郎（41期・昭14年卒）
函中同窓会の会誌をお送り下さいまして有難うございました。御忙しい中を本当に有難うございます。只行くことが出来ないのが残念です。でも写真など見れば喜ぶと思います。

◇佐々木忠郎（41期・昭14年卒）
短歌『砂山』2首
砂山は影も形もなくなりしに
　啄木沈思の像磯に立つ
をとめなりし妻と思い出の砂山の
　砂の行方を思うことあり
（新アララギ会員）

◇松井亮太郎（41期・昭14年卒）
多少血圧が高いものの、どうにか無事に過しております。健康保持のため週に2～3回プールで一〇〇〇mくらい泳いでおります。心肺によいからと医師に勧められて始めました。皆さんにもお勧めします。

◇上杉　寿彦（42期・昭15年卒）
ご連絡頂き有難うございます。

◇神山　茂郎（43期・昭16年卒）
10月18日（金）は出席致します。色々と御苦労さまです。

◇佐々木貞光（43期・昭16年卒）
役員の皆様ごくろうさま。

◇畠山　惇（43期・昭16年卒）
会に御知らせが遅くなって申訳ございません。平14年3月7日死亡致しました。生前は御世話様になりました。有難うございました。（奥様）

◇森松　高司（43期・昭16年卒）
東京白楊だより第25号特集記事〝函館町並み今昔〟は大変興味深く感動しました。木下順氏の労に多謝々々。

◇工藤　孝（44期・昭17年卒）
諸兄のご健康とご発展を祈っています。

◇荘子　直（44期・昭17年卒）
10月17日三井鉱山のOB会があり、そちらに参加するという返事を投函しました。小生最近老化が激しく、物忘れ、名前忘れが激しく、特にバランス感覚がにぶくなって、歩いていてもふらつくことが多く、とても東京に2日続けて出掛けることは危険なので18日は欠席と致します。

◇高倉　隆（44期・昭17年卒）
いつも総会の案内と東京白楊だよりお送り下さいまして有難く思っております。厚く御礼申し上げます。会の隆盛を祈念しております。

◇多和田昭二（46期・昭19年卒）
東京白楊だより第25号の「函中パソコン部コンクール優秀賞」の記事を見ました。私の孫のような後輩諸君が頑張っている姿は実に嬉しいものです。皆様の益々の御発展を祈ります。

◇近藤　充夫（51期・昭23・24年卒）
いつも大変お世話になっております。よろしくお願いいたします。

◇柴田　啓次（51期・昭23・24年卒）
親睦大会は事情あって欠席いたしますことをお許し下さい。ご盛会を祈り上げます。

◇池田　正文（53期・昭26年卒）
今回の26回白楊ヶ丘同窓会東京支部大会に何とか出席出来そうです。

◇高木　幸子（55期・昭28年卒）
8月10日函館ロイヤルホテルで、中部高校ハンドボール部同窓会主催の皆川茂夫先生を囲む会に出席して来ました。先生は兵庫県ハンドボール協会の会長として現役で、奥様ご同伴で張切っておられました。

◇浅岡　勤（56期・昭29年卒）
来年は卒業50周年になります！

◇加藤　秀一（57期・昭30年卒）
57期同期会（全国大会）は、平成14年9月16日湯の川温泉「花びしホテル」に95名が集まりました。出席者が年々減少するなかで、函館開催の前回（平成11年9月）「グリーンピア大沼」での88名を上回る盛会でした。来年は札幌の当番で「洞爺湖」ではとの声も出ておりました。

◇小竹　嘉子（57期・昭30年卒）
昭27年度か57期1年生の時だと思いますが、お祝いの祭りがあり、中部高校記念のプリント（校章入り）のタオル（手ぬぐいですね）が出て来ました。なつかしいこと！

◇吉田　精吾（57期・昭30年卒）
9月に函館で同期会を開催、約100名近い参加者があり、その前日に行われた中学校の同期会には104名が出席と、何とも大盛況でした。やはりいくつになっても故郷への愛着は尽きないようです。

◇信太　延一（57期・昭30年卒）
サラリーマンをやめて3年。他にすることがないため、ウォーキングにつかり、日本ウォーキング協会の国内15大会を通算30回参加して、二〇〇二年6月15日に金メダルを獲得しました。

◇渡部　顕（57期・昭30年卒）
今、「人づくり、森林づくり」に取り組んでいます。「森林が死ねば、人も死ぬ」と、ドイツの言。日本の森林荒廃は大変なスピードで進んでおり、一日に〝村〟一つが消えていく状況と専門家は指摘している。

◇佐々木弘明（57期・昭30年卒）
懐古趣味の域に留まらず(1)文化サークル活動を共有する(2)人生経験を現役高校生に役立たせるetcしたら如何。

◇若月　良子（57期・昭30年卒）
東京白楊だよりの「函館町並み今昔」を私の思い出と共に懐しく読ませて頂きました。ありがとうございました。

◇大関千恵子（58期・昭31年卒）
支部大会当日は、地域文化祭華展出瓶のため出席いたし兼ねます。交友の方々にご鳳声下さい。

◇芦刈　宏之（59期・昭32年卒）
03函館の予定（商用）、函中の回りを歩いてみたいですネ、楽しみです。

◇伊藤　征子（59期・昭32年卒）
今年の暑く長い夏、我が家で収穫のゴーヤで夏バテ解消、涼しくなったところで11月に行われるポプラ会ゴルフコンペに向けて練習に行かなくてはと思う今日この頃です。

◇古川　セツ（59期・昭32年卒）
同期会は万年幹事の真船さんが引受けて下さっているので、時々出席しております。

◇伊藤　紀子（60期・昭33年卒）
第25号楽しく拝見しました。横浜在住30年ですが、心は未だに函館に向いているようです。市制80周年記念の写真集を見て、通学していた頃の街を思い出しました。

◇岩崎　英子（60期・昭33年卒）
お世話になっております。よろしくお願いします。

◇水江　彰一（60期・昭33年卒）
わが60期は同期会には50名前後の出席があり盛り上がっています。最近60期の「三三会ゴルフ」も参加者が増えて楽しくやっています。今年の同期会では71期生が

第27回親睦大会

2003年10月25日(土)午後6時～

「ポプラの下(もと)に集いし我ら！2003年：函館白楊ヶ丘物語！」

開場：5時30分　懇親会：午後6時00分～8時30分

今年の白楊ヶ丘同窓会東京支部親睦大会は、母校の歴史と函館市の盛衰をからめた映像で幕を開けます。2003年の函館のホットな映像で、会員諸兄姉の郷土愛を大いに鼓舞するのが狙いです。

この映像は、母校の4代にわたる校舎の変遷を、市制80周年を経た函館市の今昔とからめて描こうと、54期生が企画しました。

製作のスタートに当たり久しぶりに函館を訪れた担当者の最大関心事は、昭和29年（1954）の洞爺丸台風ですべて伐り倒されてしまった校庭のポプラでしたが、30年後の昭和59年（1984）に新しく植えられた9本のポプラが立派に成長しているのを見てホッとしたそうです。

反面、彼の目に焼き付いたのは、駅前・大門地区の土地の虫喰い状態でした。「同窓生は、函館へ帰省してお金を落とそう（使おう）!!」と叫びたい衝動に駆られた彼は即座に「この映像を、函館に寄せる熱い応援歌にしよう！」と決意したそうです。

亭々と高きを望んで止まないポプラの向上性とたくましい成長力！

建学の精神を象徴するそのポプラの下に集いし我らの青春を見よ！

製作を進めるうちに担当54期生のボルテージは高揚するばかり。

来年は、洞爺丸事故の50周年にも当たります。感動篇が生まれることをご期待下さい。

函館情報

○函館市東京事務所

当事務所は、昭和60年開設以来、18年目を迎えました。最初永田町、2番目が番町、3番目が紀尾井町の現在の場所です。中央官庁との連絡や市政に関する情報収集などが主な業務ですが、時代は今や情報発信が最も重要です。事務所スタッフ3名で函館観光をはじめとしたシティ・セールスにも力を注いでいます。

所長　酒井　哲美
（新任）副所長　厚谷　諭
事務員　比嘉　裕子
東京都千代田区紀尾井町3－29
紀尾井町山本第2ビル2階
電話：03－3261－0072
FAX：03－3261－0339
Email hakodate@mtg.biglobe.ne.jp

○お知らせ

先ず、新函館駅が6月21日オープンしました。長年にわたり市民が乗降利用した正面に大時計のある、あの駅舎の姿はもう無くなりました。新駅舎はホーム渡りの階段も無く、頭端駅という特徴を生かした平面歩行ができる完全バリアフリー化対応を考えた造りです。

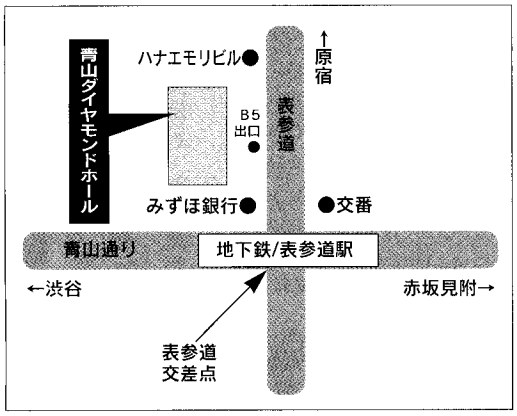
駅構内の中央広場コンコースは、ロトンダという卵型の天井から中央採光ができる構造になっており、大変明るく広く感じます。1階に土産品店3、飲食店1、コインロッカー。2階には飲食店3、そのほかエスカレーター2基、エレベーター1基あり設備も充実されました。現在旧駅舎の取り壊しも終え、駅前広場の整備工事が本格化しています。再来年春までには歩行者優先の緑豊なスペースに生まれ変わるでしょう。

さて2つ目は、近隣市町村との合併の見通しについてです。現在確実視されているのが渡島東部の南茅部椴法華、恵山、戸井との1市3町1村の合併です。近く来年12月1日合併を目指し法定の合併協議会で条件整理の話し合いが行われます。

期待されていた上磯、大野、七飯の3町とはさらに将来に向けてという状況にあり、協議の場は持ち越され話し合いは行われていません。

最後に、今年は国において整備新幹線の基本スキーム（枠組み）を決める大事な年です。年末まで気が抜けない状況ですが、官民挙げて青函同時開業に向け頑張っております。どうか皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

青山ダイヤモンドホール ご案内



◆青山ダイヤモンドホール◆

〒107-0061　東京都港区北青山3-6-8
電話：03-5467-2111

●地下鉄／銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅B5出口直結
●JR山手線／原宿駅下車・徒歩10分
※駐車場（有料）には限りがございますので、なるべく公共の交通機関をご利用下さい。

―編集後記―

例年、大会のイベント企画は担当者の悩みであったが、去年71期の精鋭によって実行されたジャズ演奏は老若男女同窓生のダンスパーティーとなって盛り上がりました。

さて今年は一挙に若返りではなく54期・70代の先輩方の企画制作による『ポプラの下に集いし我ら』のビデオ上映で幕開けされます。

特集「青函連絡船・洞爺丸」の中で一文掲載の金谷稔氏は函中野球部OBの映画監督です。若かりし頃その先輩の下で至らぬ助監督を勤めていた編集子が35年振りに再び助手としてビデオ製作に関わる事になったのは何の因縁でしょうか。「青春時代」の歌じゃないけど青春の真只中は辛い事も多かったかもしれません。でも今はすべてが函中時代の思い出となり、そして故郷函館で育まれた精神は、白楊の精魂の下にふたたび青春時代の想いを呼び戻してくれることでしょう。乞う御期待です。

今回洞爺丸の資料を集めてる最中多くの関係者が居られるのを知りました。来年事故から50年目を迎えるに当り、いろいろエピソードをお持ちの方は東京支部事務所宛に原稿を御寄せ下さい。

編集子K

東京白楊だより26号

●発　行　白楊ヶ丘同窓会東京支部
●発行人　杉田　博子（54期）
●編集責任　小林　嘉則（63期）
●発行日　平成15年9月1日

【東京事務所】
〒160－0022
東京都新宿区新宿1－13－8－302
TEL：03－3352－6281
FAX：03－3341－5048